

学生が伸びる学び方

大学選択

新たな視点



今号の視点

専門性を見直し意欲が高まる 学部横断型プログラム

子どもが成長する瞬間は、学びの過程の中にある。

近年、大学では学生の成長をより促すため、学習過程を工夫した教育活動を取り入れるようになってきた。本コーナーでは、志望校選びの観点としてはまだまだ情報が少ない「大学の教育活動」に焦点をあてる。

教育の「中身を見る」視点が 今後ますます重要に

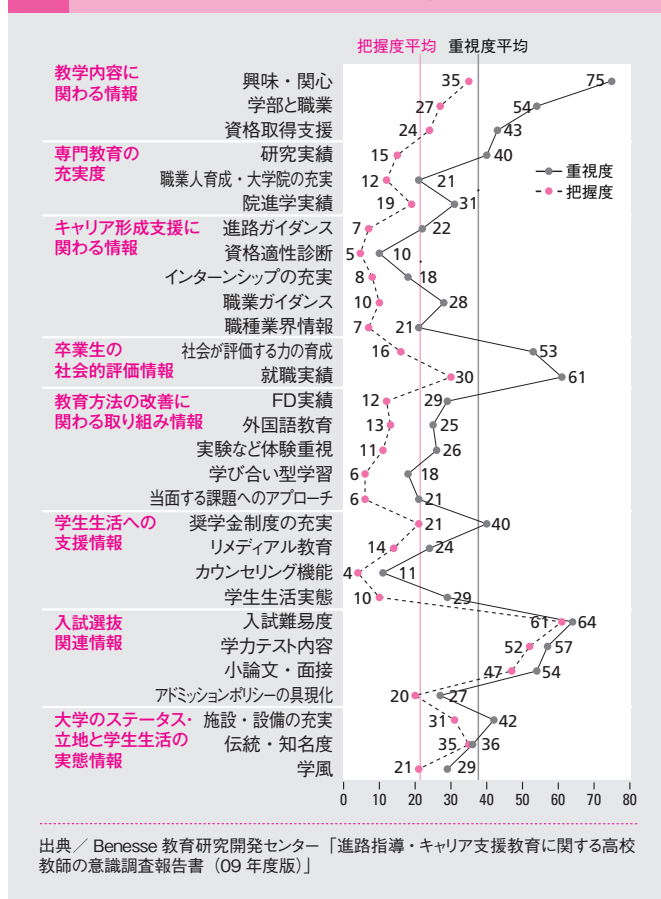
ベネッセ教育研究開発センターの調査によると、進路指導において高校教師が重視するのは、大学の入試難易度、就職実績といった「入口」と「出口」、そして学部・学科の教学内容であった(図1)。一方、教育方法改善への取り組みに対する関心は相対的に低い。

近年、社会からの大学教育に対する期待を背景に、学生本位の教育を追求する大学が増えている。

ところが、「入口」「出口」に比較して、「教育方法」の情報は高校現場に十分に浸透していない。「入口」「出口」「教学内容」に加えて、「どのように学生を育てているか」「学生がどう学べるのか」という「実践の具体的な中身を見る」ことも必要だろう。本連載では、大学での学生に対する教育実践の取り組みを取り上げながら、大学選択の新しい視点を探っていききたい。

第1回は、学部を横断した教育プログラムを通して、学生の視野を広げ、学ぶ意欲を喚起させる取り組みを追う。

図1 大学選択指導のために教師が重視する情報と把握度



他学部生との協働を通じて 自身の専門の意義に気付く

武蔵大
「三学部横断型ゼミナール・プロジェクト」

大学での学びの中心は、専門領域の追究にある。しかし、専門にこだわるあまり、就職時に、可能性を学生が自ら限定したり、他の価値観に興味を示さなかったりということになりかねない。こうした課題を踏まえ、武蔵大では、学生が多様な価値観に触れる機会として「三学部横断型ゼミナール・プロジェクト」を設けている。全3学部（経済・人文・社会）の学生による混合チームをつ

図2 武蔵大「三学部横断型ゼミナール・プロジェクト」の授業の進め方

- 1 企業からの課題は「CSR(*)報告書の作成」。企業担当者から会社概要の説明を受ける
 - 2 学部ごとに分かれて担当企業について徹底的に調査し、後半での「CSR報告書」の実制作に必要な方針や内容の予備調査を行う
 - 3 各学部の中間発表を受けて、三学部横断チームで「CSR報告書」の編集方針、構成、デザインなどを話し合い、実制作を行う
 - 4 課題を提供した企業に対して、実際に制作した報告書を報告する
- * corporate social responsibility. 企業の社会的責任

図3 企業が求める人材像

主体性	物事に進んで取り組む	84.8%
実行力	目標を設定し行動する	81.0%
課題発見力	状況分析による課題・目的の設定	79.1%
柔軟性	意見や立場の違いを理解する	71.5%
創造力	既存の発想にとらわれず解決法を考える	67.7%

※全12項目のうち、上位5つを抜粋。数値は東証一部上場企業を対象とした調査結果
出典／経済産業省「社会人基礎力に関する緊急調査」（06年4月）

くり、企業が出した課題の解決案をチームで考え提示するという「PBL（課題解決型授業）」で進める（図2）。2009年度に文部科学省の教育GPに選定された。

プロジェクトを統括する経済学部の高橋徳行教授は、「社会では、主体性や創造力など専門知識以外のさまざまな力が求められます（図3）。しかし、専門知識さえ身に付けていれば社会に受け入れてもらえると思

授業は週1コマ、履修期間は半期。定員は3学部合計で30〜36人、前期は3年次、後期は2、3年次で履修出来る。

社会で求められる力の涵養だけでなく、専門分野の学びの深化も狙いの一つだ。「予備調査の授業では、経済学部の学生は企業活動の実態について、人文学部の学生は企業文化を探るというように、学部の専門性に応じて役割を分担します。学部の授業では意識することのなかった、社会における自分の専門の意義に気付くと同時に、知識不足を痛感させられる機会にもなります。そうした気付きや反省が、学部での学びにも良い影響を与えると考えます」と、高橋教授は期待を寄せる。

人文学部4年の田原菜々美さんは、「報告書を作る時、私はデザインにこだわり、イメージでも訴えかける表現を提案しました。こうした観点は、経済学部や社会学部の学生にはなかったようです。人文学部の独自性を示せ、大きな自信になりました」と話す。また、履修した学生が特に実感するのは、コミュニケーション力の向上だという。社会学部

意識の高い先輩の言動に 触発されて意欲が高まる

中央大
「ファカルティリンク・プログラム（FLP）」

4年の中野大樹さんは、「学部のゼミでは率先して発言しなくても議論は順調に進むことが多く、自分の意見を強く主張することはありませんでした。ところが、三学部横断型ゼミでは発言しないと議論が全く進みません。積極的に発言し、議論することが相互理解を深めるのだと実感しました。学問の場でこのような体験が出来て良かったです」と話す。

総合大学の利点を生かし、学部横断型の履修プログラムを学生に提供しているのが、中央大と埼玉大だ。

中央大の「ファカルティリンク・プログラム（FLP）」は、所属学部のカリキュラムにプラスして学ぶ、全学部共通のプログラムだ。「環境」「ジャーナリズム」「国際協力」「スポーツ・健康科学」「地域・公共マネジメント」を設定し、テーマに則した科目を履修しながら、学際的な知識の習得と問題解決能力の習得を目指す。

*プロフィールは取材時(2010年2月)のものです

各学部の開講科目のうちプログラムが指定する講義科目(20単位)と、プログラムが独自に開講する演習科目(12単位)を、2〜4年次に継続して履修し、修了時には所属学部の主専攻と同程度の専門性が身に付くように体系化した。定員は各プログラム40人。履修者は、1年次11月に実施される、エントリースシートによる書類選考と面接等で決まる。学事部教務総合事務室の松井秀晃副課長は、「03年度の開始以来、認知度は年々高まり、FLPを受講したくて本学を選んだという学生もいます」と、人気の高さを話す。

学びの中心は独自に設ける演習科目(ゼミ)だ。3年間、同じテーマのゼミを選ぶ学生もいれば、関心に合わせて違うテーマのゼミに替える学生もいる。国際協力プログラム所属の法学部4年の内村文香さんは、「2、3年生の時はODAに関心があり開発経済学のゼミを選びましたが、3年生の時にいったフィリピンでの調査で英語力不足を痛感し、4年生ではビジネス・コミュニケーションのゼミにしました」と話す。

他学部や他学年の学生と同じゼミ

で学ぶことは、大きな魅力になるようだ。内村さんは、「専門知識が豊富で意識の高い先輩と接するのは、大きな刺激になりました。自分の力不足を突き付けられ落ち込むこともありましたが、かえってやる気になりました」と話す。

商学部の中迫俊逸教授は、「学部のゼミと並行してプログラムのゼミを履修するのは大変であるが故に、履修生の意識は皆、高い。そうした先輩に間近で接する後輩もまた、高い意欲を持つようになるという理想的なサイクルが生まれています。サークルではなく学びの場で他学部の先輩との交流があり、その姿からも学びを得られるのは、FLPならではのメリットです」と評価する。

さまざまな価値観に触れ 正解は一つではないと知る

埼玉大
テーマ教育プログラム

埼玉大では、早くから副専攻プログラムや英語、情報の共通プログラムなど、全学開放型の教養教育を展開してきた。05年度には、今日的な課題や社会の在り方について学び、

視野を広げる「テーマ教育プログラム」を導入。共生社会教育研究センター長の藤林泰教授は、「今の学生は、社会の出来事には、問題集のように『正解』があると思っています。プログラムを通して、社会のさまざまな価値観や考え方を知り、自分で考える力を付けてほしいと考えました」と、その狙いを話す。

テーマは3つ。「社会と出会う」は、社会人講話やNPOでの体験学習などを通して社会の一端に触れる。「環境を知ろう」は、環境関連科目の習得、森林育成活動などの実習を通して循環型社会の実現を考える。「世界を翔ける」では、国際政治・経済、途上国問題などを学ぶ。

プログラムの指定科目の20単位以上修得が修了要件で、履修の順序などの規定はない。1〜3年次前期は科目を自由に履修し、プログラムの修了認定が欲しいという学生は、3年次後期に登録の意思表示をする。

特徴の一つは、学部横断のグループ討論や体験学習が設けられていることだ。大学院理工学研究科の坂本和彦教授は、「『環境を知ろう』では、2泊3日の合宿中に植林や発電施設

見学をしました。環境問題を、自分の問題として受け止めるきっかけになればと期待しています」と話す。

異なる学問分野に触れて視野を広げること、狙いの一つだ。国際開発教育研究センター長の丹呉圭一教授は、「例えば、健康問題を考える時、汚染物質であれば理学系、身体への影響であれば医学系の知識が必要だ。場合によっては、その背景として国の法律や税制、歴史や宗教まで考慮する必要があります。必要な周辺知識を学ぶことで、自身の専門の重要性に気付くと共に、他分野との連携の重要性を知るのです」

09年度には「世界を翔ける」の発展形として、国際開発の専門知識や英語力の強化を目指した特別教育プログラム「グローバル・ユース」を始めた。TOEIC600以上の学生を対象とし、定員は20人。2年次には1年間のアメリカ留学に赴く。

教養学部1年の鈴木友里さんも、留学を目指す1人だ。「高校時代から人種問題や国際問題に関心がありました。留学で英語力を磨き、広い視野を身に付けて帰国後の勉強に生かしたい」と抱負を語る。

専門性が違うからこそ
調整力が必要だと痛感



武蔵大
経済学部経営学科3年
五十嵐潤也
(栃木県立宇都宮北高校卒業)

三学部横断型ゼミでは、人の意見を尊重する姿勢を学びました。以前は、チームで取り組む課題であったとしても、自分で出来ることは全部1人でしてしまい、人に頼ることはありませんでした。私自身、それでは社会で通用しないと自覚していたので、三学部横断型ゼミでは、人の意見を尊重して柔軟に対処するように意識しました。

経済学部の学生は、ある程度ゴールを描き、効率的に物事を組み立てていきませんが、人文学部の学生は未知の可能性も探してみるというように、学部によって研究のアプローチが異なります。

そのため、意見が衝突することが度々ありました。私も最初は経済学部寄りの考えでしたが、頭を切り替え、ゼミが終わった後にも他学部の学生と少し気楽なモードで話してみたり、その声を経済学部の学生に伝えたりして、対立する意見の間に立って調整役を務めることに徹しました。その結果、全員のベクトルが合ってきて、質の高い報告書が完成し、自分の果たした役割にも自信が持てました。

主体的な学習姿勢が
自然と身に付いた



中央大
法学部政治学科2年
中西英一郎
(東京都立八王子東高校卒業)

F L Pに所属する前と後では、学生生活がガラリと変わりました。法学部には司法試験や公務員試験を受ける学生が多く、個人で取り組む勉強が中心です。また、授業は、高校の授業と同じように、出された課題に答える学習が大半でした。

一方、F L Pの授業では、問いを立てるところから始まります。特に、私が所属するゼミの先生は、細かく指示をしません。結果は厳しく求めます。テーマ設定も研究の進め方もすべて自分自身で考えなくてはならないので、自分で学習をマネジメントするようになりました。受け身の学習に飽き足りない人、主体的な学習姿勢を身に付けたい人にはお薦めのプログラムです。

学問の場で先輩や他学部の学生とかかわれるのが、F L Pの大きな魅力です。特に、意識の高い先輩から得るものは大きく、専門知識だけではなく、学習に対する姿勢でも後輩の模範となるよう、F L Pの場で自分を高めたいと思います。

NPO活動で
世界への視野が広がる



埼玉大
経済学部経営学科2年
高橋史子
(山形県立山形西高校卒業)

私は09年度の前期に「社会と出会う」の「NPOと出会う」という科目を履修しました。経済学部は座学による講義が中心で、フィールドワークをしたり、外部の方と接したりする機会はほとんどありません。視野を広げたいという思いで、テーマ教育プログラムを履修しました。

国際交流活動を行うNPOでインドやフィリピン、中国などの方々と交流し、日本語教室の講師、七夕祭りの出店や子どもの宿題の手伝いなどをしました。インターンシップを通して一番変わったのは、世界への視野が広がったことです。外国人と親しく接するうちに外国の状況や文化の違いを知り、他人事のように思っていた海外での出来事やニュースも身近に感じられるようになりました。

外国人への支援を熱心に行うNPOの人たちとの出会いも、大きな刺激になりました。NPOとの交流は今も続いています。3年生になると専門科目の履修で忙しくなりますが、出来るだけ時間を作って国際交流の活動は継続していきたいと思っています。

まとめ
大きな刺激が得られる
他学部混在の授業

複数学部の学生が集まる学習法には次のような成果が見られた。

- ◎自分の関心の範囲内で考えがちな学生に刺激を与え、すぐに正解を求める意識に揺さぶりをかけられる。
- ◎一つのテーマでもいろいろなアプローチがあり、解決策もさまざまだと気付くことが出来る。
- ◎自分の専門知識や能力を相対的に把握出来、それを基に学びの目標を具体的に想定しやすくなる。

同様の教育手法として、「副専攻」等の呼び方で他学部科目を積極的に履修させる大学もある。専門分野以外にも多様に学べる仕組みや、自分を相対的にとらえさせる仕組みの有無も、大学選択の視点の一つとなるだろう。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail: view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

*プロフィールは取材時(2010年2月)のものです